保育園年長児における読み書きの発達に関する研究
――保育士向けチェックリスト作成を通して――

東　俣　淳　子

Ⅰ．はじめに

近年、発達障害に対する関心が高まっている。特別支援教育が導入されて７年が経過し体制が整いつつあるが、小中学校に比べて幼稚園・保育所や高等学校での支援は十分とは言えず、課題が残っている。特に就学前の子どもに対しての支援は､行動面の支援に関する研究が多くなされ､読み書きに関する支援はほとんど実施されていない。

就学前の子こどもに関する支援に関しては、筆者が携わっている読み書きのレディネス検査（大岡ら, 2010）など､専門家の介入によるものが多い。

Ⅱ．目的

本研究では、就学後の学習で必要となる読み書き能力について、専門家の個別評価ではなく、子どもと直接的に関わる保育士の視点で日常の読み書き能力につながる活動を評価できるチェックリストの作成を考えた。チェックリストであれば、簡便に短時間に行うことが可能である。さらに読み書きの両能力のレディネスに関する定量化された結果を得ることで、就学後の読み書きに関する問題の早期発見のスクリーニング機能としても期待できる。また、保育士がチェックリストを記入することで、子ども個々の読み書き発達の過程を把握することができ、保育士の専門性が向上し、日常の保育場面へ活かすことができるようなチェックリストの作成を目的とする。

Ⅲ．調査

Ⅲ−１．予備調査の対象と方法、および結果

保育所での本調査前に予備調査として、予備調査チェックリストを作成し（表１）、実施した。

対象：A 市 B 幼稚園年長児100名。

方法：読み書きレディネス検査（前述）を対象児全員に実施し、予備調査チェックリストを年長児クラス担任に実施した。

結果：⑴読み書きレディネス検査の評価項目と、予備調査チェックリストとの一致率が高い項目が多くみられた。⑵音韻認識課題とことば遊びの関連性はみられたが、逆唱課題3mora と「３文字のことばを素早くさかさまにいえるか」の一致率は、他の項目に比して低い結果であった。⑶「自分の名前を書く」「三角形の模写」で全員ができるとチェックした。

Ⅲ−２．本調査の対象と方法、および結果

対象：A 市保育園年長児472名。

方法：読み書きレディネス検査を対象児全員に、本調査チェックリストを年長児クラス担任に実施した（表１）。

結果：⑴音韻認識課題としりとりの可否との関連性はみられたが、他のことば遊びとの関連は十分に得られなかった。⑵音削除、逆唱課題ともに3mora 課題で対象児の約半数が全問不正答であった。⑶文字への興味や音読に関する項目と、清音、濁音・半濁音の音読との関連性はみられたが、拗音との関連は十分に得られなかった。⑷名前の書字とフロスティッグ視知覚発達検査との関

表 1

	読み書きレディネス検査項目	予備調査チェックリスト項目	本調査チェックリスト項目	今後の検討内容と項目の設定
音韻認識	mora 抽出、mora 抽出位置、音削除2mora、音削除3mora	①しりとりをするとすみやかに語を想起できる	しりとりをするとすみやかに語を想起できる	同じ項目
			階段等で「グリコ」などの音数遊びをしますか	ことば遊びの種類を検討して追加
	逆唱2mora	②2 文字のことばを素早くさかさまに言える（3 秒以内）	削除	3 文字に比し、2 文字の方ができるできないの可否がはっきりしているため、項目として 2 文字の方が妥当
	逆唱3mora	③3 文字のことばを素早くさかさまに言える（5 秒以内）	3 文字程のことばをさかさにして遊びますか	
読み	仮名 1 文字の音読	④自分の名前を音読することができる	自分の名前を音読することができますか	自分の名前の音読の可否と、自分の名前以外の文字が音読できるかの 2 択にする。また、文字を読むことと読解できているかの関係について検討
		⑤ひらがなで書かれた自分の名前が、自分のものだとわかる	自分の所有物など、文字を読んだだけで自分のものだとわかりますか。	
		⑥名前以外の文字もいくつか拾い読みすることができる	名前以外の文字をいくつか読むことができますか	
		⑦濁音や拗音があってもすらすらと読める	濁音や拗音を含んだ文字があっても読むことができますか	清音以外の文字も音読が可能か否かを尋ねる項目として、同じ内容を継続
書き	フロスティッグ課題（空間における位置、空間関係）		日常の生活で目にする文字に興味を持って書こうとしますか	文字への興味、書くことへの興味の有無について聞く項目として、同じ内容を継続
		⑧自分の名前の中の字がいくつか書ける	自分の名前の中の文字をいくつか書くことができますか	自分の名前を書けるか否かと、自分の名前以外の字を書けるか否かの 2 択にする。また、自分の名前が書けるかについては、詳細の基準を予め提示
	名前の書字	⑨自分の名前を正しくひらがなで書くことができる	自分の名前を正しくひらがなで書くことができますか	
	三角形模写	⑩まねて三角形が描ける	まねて三角形が描けますか	同様の項目
	菱形模写	⑪まねて菱形が描ける	まねて菱形が描けますか	同様の項目
		⑫簡単な図形の左右が見分けられる	左右がわかりますか	文字を書くことと、文字（図形や記号）の見分けに関しては、項目の検討が必要
			左右を間違えずにお遊戯ができますか	
発音		⑬話すことばが正しく発音できている	削除	発音の誤りの例などをあげて、発音に関する項目を再設定
		⑭ことばや聞こえで心配なことがある	削除	

連性はみられた。三角形模写は、菱形模写に比べ、高い一致率だった。左右の認識とフロスティッグ視知覚発達検査との間に関連がみられた。

Ⅳ. 考察

予備調査より得られた結果をもとに、チェックリストの項目内容を検討し、本調査を実施した。

音韻認識課題にあたることば遊びの選択については、「グリコ」のことば遊びはしりとりに比してイメージしにくい課題であることが示唆された。

文字の読みには、文字の種類により獲得過程があり、それを詳細にチェックすることは困難なことが窺われた。左右の認識や身体を動かすだけでは、書字に関することが直接的な評価ができていないことが考えられる（表 1）。

Ⅴ．今後の展望

⑴　チェックリストに関して

チェックリスト項目に関して、得られた結果から文言を修正する。項目の内容が、読み書き能力と関連性があるか否かを再検討する。

今後は、チェックリスト項目の内容妥当性を検討する必要がある。

そのため、保育士が使いやすいチェックリストにするため、つかいやすいさ等のアンケートを実施する必要がある。

⑵　チェックリストのスクリーニング機能の可能性

今回は個別の結果は言及していない。今後の課題として、読み書きレディネス検査とチェックリストで、『できない』とチェックされた児の就学後の読み書き能力の獲得を追跡調査して、発達過程を確認する。さらに、就学前における子どもの発達過程に適した必要な支援が提供することである。

⑶　保育場面への寄与

読み書き能力は、就学後に突然獲得されるものではない。保育士が読み書きを含めたことばの発達過程について知ることで、日常の様々な保育場面の活動が文字獲得のレディネスと関連性があり、どのような過程で文字を獲得しているのかを知ることが重要である。保育士だけに任せるのではなく、専門家（例えば言語聴覚士や作業療法士等）との協働が必要となるだろう。

引用文献

大岡治恵（2010）：幼児期の音韻認識能力の発達に関する調査研究．小児の精神と神経50 (2).